

# 聖パトリックの歴史と伝承

The History and Legend of Saint Patrick

葛 井 義 顕

Yoshiaki Fujii

## 序論

### I 節 動機

現代を生きる我々は、破局の時代を生きているように思われる。なぜなら、我々現代人は「神との交わり」を希薄にし、他者との心の交流を失いだし、隣人への愛の意義が分からなくなりだしているからである。苦難、辺境とまともにぶつかることができなくなっているからである。このような私たちにとって、辺境に生き、迫害と侮辱から免れることの出来なかった「弱者」の側に置かれたアイルランドの人々が保有・継承してきた「神との豊かな関係」、「人々の神を中心とした交流」の素晴らしさは私たちに語りかけ、教えることが多くあるだろう。

アイルランドは、1171年から1949年までの約780年間、イギリスによって支配され続けてきた悲しい歴史を持つ国である。(現在も、北部はイギリス領である。) このイギリス支配下の17世紀、アイルランドでは、プロテスタント(宗教改革以後入植してきた英国国教会員)とカトリック(宗教改革以前に入植した英国人と元来アイルランドに居住していたゲール人)の権力争いが起こった。この戦いは最終的にプロテスタント側が勝利を収め、

宗教改革以後入植したプロテスタント英国人がアイルランドの全権力を握った。彼らはこのような争いが再発しないように、1695年カトリック対して刑罰法<sup>1)</sup>をもってあたり、カトリックの影響力を減少させ、またアイルランドの国教を英国国教会(プロテスタント)とした。このようなイギリスの支配下におかれた状況の中で、カトリックを信仰するアイルランド民族は、多くの抑圧を受けてきた。しかし、彼らは古から受け継いできたカトリックの信仰を捨てることなく、現在まで継承・保持しつづけている。なぜ彼らは、多くの苦難を受け続けてきたにも関わらず、カトリックを守り通すことができたのだろうか。その理由として、アイルランドは、7世紀以来アイルランド・カトリック教会を創設したと考えられる聖パトリック(Saint Patrick)によって一つにまとまってきた国家であり、彼の伝えたカトリックの信仰が、民族の絆であったということがあげられる。このことは、一つ、聖パトリック死後1500年以上経過した現在においても、アイルランド民族が、聖パトリックの命日だとされる3月17日を宗教的のみならず民族的祝日と位置付けていること、二つ、アイルランド共和国の象徴とされる「

シャムロック (shamrock) 」（三つ葉のクローバー）は、聖パトリックが人々に三位一体を教える際に例えとして用いたという伝承から来ていることから理解できる。

5世紀にアイルランドで宣教活動を行った聖パトリックの自らの使命とアイルランド人の救いのために愚直なまでに宣教活動に邁進する姿は多くのアイルランド人の心を動かし、その結果、多くのキリスト教者を生むことになる。そして彼の宣教姿勢を見習った後継者たちの宣教活動によって、紀元前よりゲール特有のドルイド崇拝を行ってきたアイルランドが、わずか二百年の間にキリスト教国となった（7世紀）。そして、彼らは7世紀以来、常に苦難の中で、もがき苦しみながらも、神と真正面から向き合い、神に強められ、支えられてキリストの真理のために全うした聖パトリックを、絆とし、見習ったからこそ多くの苦難の歴史を乗り越えてくることが出来た。アイルランドの人々は、聖パトリック同様、多くの苦難の中で、常に神との関係に生き、神に強められ、支えられてきたのである。

イエス・キリストがそうであったように、キリスト教は、迫害や屈辱や苦難の中で、出来上がったものである。アイルランド人もまた苦難の歴史を歩み、彼らが信奉する聖パトリックもその様な歩みをした。本稿は、アイルランドの人々が保有・継承してきた信仰（神との関係）のもととなる聖パトリックの歴史と伝承を取り扱うものである。

## II 節 先行研究

1695年に表された刑罰法によってカトリック研究は、全面的に禁止された。しかし、ダニエル・オCONNELL (O'Connell Daniel)<sup>2)</sup>の活躍により、1829年「カトリック解放令」が出されると、伝統的アイルランド学問を復興しようとする動きが見られるようになった。

そして、聖パトリックの研究も盛んに行われるようになった。聖パトリックについて、記された書物の中で、史實的に信頼をおけるものは、聖パトリック自身が記した『告白』(Confessio)<sup>3)</sup>『書簡』(Epistola)<sup>4)</sup>である。しかし、これらの書物は彼の司教職や宣教活動に対する弁明書、パトリックが改宗したアイルランド人を襲撃した暴君コロティクス (Coroticus)<sup>5)</sup>に対する手紙であり、ここには彼の宣教期間や場所、人物、彼の宣教の背景や活動の範囲などは全く示されていない。このことを補うために、後の時代にパトリックのことを記したいくつかの伝承が作成された。7世紀のムルクー (Muirchu)<sup>6)</sup>の『聖パトリック伝』(Vita S.Patricici)<sup>7)</sup>やティレハン (Tirehan)<sup>8)</sup>の『聖パトリックに関する覚え書き』(Memoranda)<sup>9)</sup>、9世紀においては、先述した二つの初期伝承作品に、更に豊富な民間伝承を組み入れて、大衆に身近なパトリック像を描いた『聖パトリック伝』(Betha Phatraic)<sup>10)</sup>がこれにあたる。これは三部作で構成されるため『三部作伝記』(Tripartite Life)とも呼ばれる。しかし、これらはアイルランド各地に残る口頭伝承・民間伝承に依拠しており、また二つの初期伝承作品は司教任命以前のパトリックの霊的養成場所や誰によって司教に任命されたか等のことが異なっており、史實的に信用できるものではない。

このように、聖パトリックが史實的に不明瞭な点を多く持つことから、「カトリック解放令」以後から現在まで、パトリックを歴史的に解き明かそうとする試みが成されてきた。しかし、史實的に確かな資料が絶対的に不足しているため現在も解決されていない。パトリックの研究は、パトリックの伝承を史実として受け入れる「伝統派」と、伝承を排除し、アルスター年代記 (Annals of Ulster)<sup>11)</sup>等

の年代記によって徹底的に歴史的事実を追求しようとする「反伝統派」に分かれ、長い間、討論されてきた。伝統的にカトリックの学者は伝統派に属し、プロテスタント（聖公会）の学者は反伝統派に属している。

#### (1) J.H.トッド

「カトリック解放令」が出された後、最初に本格的パトリック研究に携わった人物が、J.H.トッド（James Henthorn Todd 1805-1869）<sup>12)</sup>であった。彼は著書『アイルランドの使徒聖パトリック』（St. Patrick, Apostle of Ireland）<sup>13)</sup>の中で、ムルクーやティレハンの伝承には、パトリックとゲルマヌス（Germanus）<sup>14)</sup>の関係や教皇ケレスティヌス（Coelestinus）<sup>15)</sup> 1世による派遣の叙述が見られる。これらは、オクセールの教会にあったと推測されるアイルランド司教パラディウス（Palladius）<sup>16)</sup>の伝記をパトリックのものと混同し、パトリックの伝承の中に誤って、もしくは故意に挿入した結果であるという説を打ち出したのである。トッドは「カトリック解放令」直後から、カトリックの伝統的パトリック研究に疑問を抱き、この説を打ち立て伝統的パトリック研究を批判する先駆者となったのである。

#### (2) カトリックの研究（トッドに対抗して）

トッドの研究に対抗してカトリック側は、1869年聖公会の「国教制度廃止」を機に、「カトリック・アイルランドの使徒パトリック」を強調した伝記作品<sup>17)</sup>を続々と生み出す。これらは聖公会に対して、「アイルランドにキリスト教を伝えたのは聖パトリックである。イギリスの統治下にあり、聖公会を国教とされた悲しい歴史を通過してきた現在においてもアイルランド人はカトリックを信仰し、パトリックを深く崇拜している。」と言及するものであった。したがって、彼らの伝記はムルクーやティレハン、『三部作伝記』などの伝

承を忠実に受け入れており、伝統的パトリック像を守ろうとする立場にあるのである。

#### (3) 20世紀の研究

トッドの研究を発端にして、20世紀においては大きく分類して二派（伝統派・反伝統派）に分かれ現在まで論争が続けられている。伝統派は初期伝承作や『三部作伝記』を忠実に受け入れ、それらを『告白』、年代記などによって歴史的に位置付けようとする派であり、J.B.バーリー（J.B.Bury）<sup>18)</sup>、L.ビエラー（L. Bieler）<sup>19)</sup>、E.マックニール（E.MacNeill）<sup>20)</sup>、J.ライアン（J.Ryan）<sup>21)</sup>などカトリック研究者の多くがこれに属す。

それに対して、反伝統派は伝承を排除し年代記などによって、徹底的に歴史的事実を追求する派である。彼らはJ.H.トッドの研究を発展させ、二人またはそれ以上のアイルランド司教（パトリック・パラディウス等）を想定して、それぞれの宣教期間を推定している。T.F.オラヒリー（T.F.O'Rahilly）<sup>22)</sup>やJ.カーニー（J.Carney）<sup>23)</sup>ら多くの英国国教会（プロテスタント）研究者がこれに属す。

### III節 目的と意義

前節の先行研究から『カトリック解放令』以後のパトリック研究は、カトリック対プロテスタント（英国国教会）の図式から成り立っていることが理解できる。7世紀から現在まで、アイルランド民族は、『告白』や『書簡』に見られる歴史的パトリック像は勿論だが、それだけでなくムルクーやティレハンの初期伝承作や『聖パトリック伝（三部作伝記）』に描かれた伝承的パトリック像によって一つに結び合わされた民族である。パトリック研究が盛んになった19世紀前半以降、オCONNORの活躍によって、アイルランドではカトリックが勢力を強め、独立戦争を押し進めていった。その時代と平行してカトリック、プロテ

スタント間のパトリック研究が進められてきたのである。この時代状況において、プロテスタント側はアイルランド民族の絆である伝統的に民族が保有するパトリック像を砕き、彼らの勢力を減少させるために、歴史的事実を追求した研究を行った。一方、カトリック側は、彼らの絆であり、彼らの原動力である伝統的に民族が保有するパトリック像を保持するために研究を行ったのである。パトリックの研究は単なる一司教の研究ではなく、カトリック・プロテスタント間、アイルランド・イギリス間の歴史を変える可能性をもった重要な研究なのである。

伝統派・反伝統派間（カトリック・プロテスタント間）のこの論争は、現在においても、解決されていない問題である。伝統派にとっては、どうしても守り抜きたいものであり、反伝統派にとっては、どうしても打ち壊したいものである。この全アイルランド民族の絆・彼らの心の支え・彼らの信仰の基盤である聖パトリック像とはいかなるものであるかを考察するのが本稿の目的である。

## 第1章 歴史的聖パトリック像

### I 節 歴史的聖パトリック像—聖パトリックの持つ二つの側面—

『告白』より理解することの出来る、歴史的聖パトリック像は、二つの側面を持っている。本節では、歴史的パトリック像の持つこの二つの側面を『告白』より考察する。

#### ① 人間的弱さ

聖パトリックは、彼が司教職に適任か否かが論議された会議において、彼の「少年時代の罪」を批判された際、また司教時代に教会内部より彼に対して司教職としての適正に関して批判された際、その批判に対して、弁明することなく沈黙を続けた。それは、彼が

「教養ある人々に私が告げたい最も深い意味を理解してもらうために、鋭敏な言葉を用いて、たくさんの言葉を吐き出して説明することは出来ない。」(Conf.10) と語るように、彼には高い教養を持つ、聖職者を相手にして、彼らと論議しあえるほどの能力を持ち合わせていなかったからである。彼は、基礎的学問・知識をより多く吸収するのに適した時期である16歳から22歳までの6年間を、アイルランドで、奴隷となっていたために、勉学の機会を失っていた。しかし、奴隷生活から逃亡した後、神によって与えられた使命を全うするために、何十年もの期間、司教となるための勉学に励んだ。しかし、それでも、彼は幼少時代から言語・法律・聖書などの勉学に懸命に励んできた聖職者たちと対等に、自信をもって論議するだけの学識を得ることは出来なかった。そのために、彼への批判に対して、「私は長い間、書き表わすことを考えていた。しかし、〔他方〕私は今までためらっていた。というのは、わたしは人々の批判の前に自分自身をさらすのを恐れていたからである。なぜなら、法律や聖書に熟知し、幼少より言語を完全に習得した人々のように、私は学んでいないからである。」(Conf.9) と語っている。この『告白』が表わすように、聖パトリックは弁明書を記したいと願っていたが、聖職者の前に自分自身の無知をさらすことを恐れ・恥じ、その都度、弁明をすることが出来なかった。そのことによって彼への蔑みや批判はますます強くなっていった。聖パトリックは、「死ぬ直前」(Conf.62) に、批判に答える決心をし (Conf.11)、『告白』を記すことになる。しかし、この段階においても、彼が「今でも私は、学んできたことが明らかにされるのを最も恥じ、恐れる。」(Conf.10) と語るように、彼は自分自身の学識への劣等感を完全には克服出来ていない。聖パトリックは、

聖職者としての一般的学識を獲得した人々に囲まれた環境の中で、学びが足りないという劣等感に、生涯苦しみ続ける弱さを持つ存在なのである。

## ② 信仰的強さ

聖パトリックの宣教活動は、その当時ローマ・カトリック教会から派遣された司教たちの行っていた宣教方法とは大きく異なっていた。そのため、彼は先に述べた司教職適正かとの批判だけでなく、彼の宣教活動に対しても多くの批判を受けていた。この批判は、先述した彼の弱さが要因となっているわけではなく、彼の持つもう一つの側面、強さが要因となっている。彼は『告白』において、司教職適正批判だけでなく、この宣教活動への批判にも答えている。『告白』の中における、宣教活動への批判に対する聖パトリックの弁明を見ると、彼に対して二つの批判が成されていたことが理解できる。その二つとは、以下の通りである。①危険を冒してまで、神を知らない人々に伝道を行おうとする態度への批判。②信仰者からの寄付を拒否する宣教方針への批判。

第一の批判は、『告白』46章に見ることが出来る。この章で、聖パトリックは、「多くの人々が私の宣教を妨げようとする。そして、彼らは私の背後で、『なぜあの人は、神の知識の無い敵の中の危険へと身を投じるのか』と批判する。」(Conf.46)と記している。当時の血縁的家族共同体を基盤とするアイルランドの氏族制社会において、各氏族の領域を超えて活動することは、非常に困難なことであった。そのような状況において、ローマ・カトリック教会よりアイルランド司教に託された任務は、既にキリスト教信者となっているアイルランド人の信仰の維持と反ペラギウス対策であった。しかし、彼はこの批判に臆することなく、自らの宣教活動を語る。「私

は神の利益のために、アイルランド全土を巡りました。そして、全ての地域で、身に危険を感じるような脅しを受けました。しかし、私は以前どんな聖職者も行ったことの無い、もっとも遠く離れた地域さえ行きました。そして、そこに住んでいる人々に洗礼を授けることができ、祭司に任命することができ、彼らの信仰を強めることが出来たのです」(Conf.51)。「私は不信仰者からの侮辱に耐え、私の宣教活動に対する批判を聞き、また多くの迫害に耐えてきた。拘束さえされたのである。」「私はためらい無しに、喜んで神の名に対して、神が与えてくださった私の生命さえも与える準備が出来ている」(共にConf.37)。「私たちは、〔信仰の〕証をしてきました。ですから、誰も行ったことの無い場所にも福音を伝えることが出来たのです」(Conf.34)。

これらから理解できる聖パトリックの行動は、彼の宣教がローマ・カトリック教会から与えられた任務を超えていることが理解できる。彼の宣教活動とは、既にキリスト者になっている人々へというよりも、迫害や侮辱、生命の危機に耐えぬいて全アイルランドの非キリスト教徒に、神の名を伝え、キリストの教えを説くことに重きを置くものであった。

次に、第二の批判であるが、この要因となる宣教方針は、『告白』49章に見ることが出来る。ここには、次のような内容が記されている。「キリストにおける兄弟たち、キリストにおける処女たち、それと同じぐらい神聖な女性たち、彼らは絶えず私に小さな贈り物をしつづけてくれる。彼らは装身具やそれに類するものさえも祭壇の上に差し出した。しかし、私はその度、それらを返してきた」(Conf.49)と。この宣教姿勢に対して、第二の批判がなされるのだが、この批判に対して聖パトリックは、「私の不正行為を口実に、私が攻撃的になり、私の司教職が汚されな

いように、また信仰の無い者に、批判や侮辱の機会を与えないように、私は自分自身を律している」(Conf.49)のだと弁明している。しかし、彼の寄付を断る方針は、聖職売買をしているのでは無いかという疑問の要因ともなる。なぜなら、教会にとって寄付というのは、宣教活動を維持させる資金源となっていたため、それを受け取らない彼は、聖職を授ける時に金品を受け取っていると疑問視されたからである。このような疑問に対して、彼はこのように反論している。「私は多くの、何千もの魂に、洗礼を授ける時に、ただの一文でも彼らから貰っていたなら、私に教えて欲しい。そうすれば、私はあなた方にそれを返すでしょう。また、微力な私の努力を通して、祭司に任命する時、聖職を与える時、片方の靴でも要求したでしょうか。もしそうであるのなら、私に教えて欲しい。そうすれば、私はあなた方にそれを返すでしょう」(conf. 50)。そして、彼は聖職売買をしているどころか、宣教活動がスムーズに行えるように、以下のように金品を与えていたことを述べる。「私はアイルランドの人々が、私を受け入れるために、主のためにお金を使う。」(Conf. 51)、「私はアイルランドの王たちに贈り物を持っていった。それに加えて、私に同伴して旅した王の子供たちに報酬を与えた」(Conf. 52)。「私は訪れた全ての地域で、法を管理する人々に、どれくらいのお金を支払ったか、あなた方は自分自身の経験から知るでしょう。私自身が見積もると、私は彼らに男の奴隷十五人の価格に勝るとも劣らない額を払った。」(Conf.53)と。

これらの言及から、理解することの出来る聖パトリックの宣教活動は、非キリスト教徒からの批判の火種になりやすい、信徒からの寄付をいっさい受け取らないものであり、また、支配階級に金品を与えることによって、

彼らにキリスト教伝道を認めさせ、彼らを通して全アイルランドにキリスト教の影響力を与えるものであった。聖パトリックのこの方針は、理にかなっている。なぜなら、当時のアイルランドでは、古くからの習慣法<sup>24)</sup>によって、賠償制度を価値基準（全ての物事を金品で解決する）とする社会制度が成り立っていたからである。聖パトリックの用いたこの方法は、急速にアイルランドにキリスト教を広めさせた要因の一つではないだろうか。先に述べた二つの批判より、聖パトリックの宣教活動が、どのようなものであったか理解することが出来た。この宣教活動には、批判や蔑みにさらされていても、また、どんな危険な状況におかれていても、それに屈すること無く、神から与えられた彼の使命を全うする彼の強さが現れている。聖パトリックは先述したように、弱さを持つだけでなく、宣教活動に現れる強さをも兼ね備える存在なのである。

③ 弱さと強さを兼ね備える聖パトリック  
 それでは、自分自身の無学に生涯苦しみ続ける弱者である聖パトリックが、いかにして強さをも兼ね備えたのであろうか。弱者聖パトリックは、夢体験の出来事を境にして、強者聖パトリックになったわけではない。弱者聖パトリックは、その出来事を境にして、弱さだけでなく強さをも兼ね備えるようになったのである。この弱さから強さを勝ち取る段階は、プロティノス (Plotinos)<sup>25)</sup>によって主張され、後に偽ディオニシウス (Pseudo-Dionysius) によってまとめ上げられた文書<sup>26)</sup>に見られる「浄化・照明・合一の三道」にもあてはまる。これは、人間が霊的生活の中で、どのような段階を踏まえて最終的に神と合一するのかを述べたものである。(人間はこの世の欲を完全に捨て去ることによって罪が清められ<浄化>、罪が清められたこと

により神の呼びかけを理解できるようになる<照明>。そして、それにより、自らの全てを神に委ねる事ができる。<合一>)

聖パトリックは、「神に背反し、神の命令に従わず、祭司にも従わなかった」(Conf.1)少年時代の自分自身の姿を、「深い泥の中で、転がっている石ころ」(Conf.12)に例えている。このように、神から離れ、深い泥の中でさまよっていた彼に、神は奴隷生活を通して、誤りを悟らせ、彼は次第に深い信仰を持つようになる(浄化)。

そして、その後、彼は夢の中で、キリストや聖霊(ヴィクトリクス)に導かれ、強められ(照明)、奴隷生活から逃亡し、霊的養成を行い、「アイルランド司教として、非キリスト者にキリストの教えを説く」という使命を課せられ、司教としてアイルランドに向かう。その時の状況を、彼は「神は、力強く現れ、慈悲において私を[泥の中から]持ち上げ、上へと押し上げ、壁の頂上に私を置いた。」(Conf.12)と語っている。聖パトリックは、誤りを気付かせ、神のもとに立ち返らせ、罪びとであり弱者である彼に重大な仕事を与えてくださった神に心から感謝し、与えられた使命に全うする決心をした。

しかし、彼は自分自身が弱者であることを、深く痛感しているために、宣教活動に自信が持てなかった。その時、夢の中でキリストは彼に「私の心を汝に与える。汝の中で語ったのは私である。」(Conf.24)と語られ、聖霊は使徒たちが言っていた「霊も弱い私たちを助けてくださいます。私たちはどう祈るべきか知りませんが、霊自らが、言葉に表わせないうめきをもって執り成してくださるからです。」(Conf.25, Romans 8:26)という言葉を彼に思い出させた(照明)。聖パトリックは、このキリストや聖霊から与えられた言葉を生涯保有し続けるのである。この言葉によ

て、その後、彼は土の器である自分の中で、神(キリスト・聖霊)が語り、助け、励ましてくれると、考えるようになった(合一)。そのことにより、自分自身の弱さを痛感した時には、彼は全てを神に委ねることが出来るようになり、批判や生命の危機に屈することなく宣教活動に邁進する強さを手に入れることが出来た。この強さは弱さの上に立った強さ、神に委ねきった強さである。つまり、彼は人一倍、自分自身の弱さを知っていたからこそ、そこから生じた「強さ」は測りがたいほど、強固なものとなった。ヘブライ人への手紙11・34に記されているように、「弱かったのに強い者とされ」たのである。したがって、歴史的聖パトリック像とは、自分自身の劣等感に生涯苦しみ続ける弱者であるとともに、その弱者である自分自身を神に委ねることによって「強い者」ともなったのである。

## 第2章 歴史的聖パトリック像から伝承的聖パトリック像へ

『告白』に記された歴史的聖パトリック像は、多くの人々の心を揺り動かし、彼の宣教姿勢は多くのアイルランド教会の後継者たちに受け継がれた。そのことにより、アイルランド教会は独自性を保有するようになる。この独自性は、7世紀イングランド宣教の際に、はじめて他教会に認識され、他教会からの批判の的となる。そして、アイルランド教会内部では、独自性を守り通そうとする「伝統派」と独自性を排除しようとした「反伝統派」に分かれて、1世紀にも及ぶ「復活日論争」が起こる。この論争によって、アイルランド教会の保有する独自性は変容され、それに伴い聖パトリックの伝承が記されることによって、その独自性をもたらした原因である歴史的聖パトリック像にもまた変容が加えられる。本章では、この歴史的聖パトリック像がもたら

したアイルランド教会の独自性、伝承的聖パトリック像が形成されるまでの時代状況、伝承的聖パトリック像を生み出す三伝承について述べる。

## I 節 アイルランド教会の独自性（歴史的パトリック像の影響）

### ① 復活祭の日付について

初代教会以来、復活祭（イエス・キリストの復活を祝う）は、キリスト教会の中で重要な位置をしめてきた。しかし、その日付はキリスト教の宣教範囲が余りにも広がりすぎたことや、各地域で復活祭がまちまちに祝されるようになったことから統一されにくくなった。しかし、6世紀末から7世紀にかけてグレゴリウス1世が普遍的世界教会の実現という理念を表明したため、西方教会は、ディオニシウス・アレクサンドリア方式<sup>27)</sup>とヴィクトリウス・ラテン方式<sup>28)</sup>の二方式によって、復活祭の日付を同一の日付に決定し、全教会にそれに従うように強制した。しかし、アイルランド教会はその決定に従わず、独自の方式をもって復活祭を実施していた。<sup>29)</sup>

### ② 司教兼修道委員長制・司教裁治権

6世紀において西方教会では、既に司教制度と修道院制度は分離しており、教皇によって任命された司教の下に全ての教会や修道院が置かれる構造を取っていた。それに対して、アイルランド教会も当初（440-543年）は、氏族領域ごとに配置した司教制度が成り立っていた。しかし、543年以降になると、アイルランド教会の教会制度は急激に変化する。司教に代わって修道委員長が多数を占めることによって、修道委員長が司教以上の力を握るようになり、約三百に及ぶ修道院共同体がそれぞれ異なる制度と独立した裁治権を有するようになる。更に、599年以降になると修道院共同体の数は千を超え、大修道院共同体

に統合される。そして、大修道院共同体委員長が司教職を兼ね、司教としての裁治権を行使する制度が成り立つ。<sup>30)</sup>

### ③ 独自性についての考察

アイルランド教会に独自性が備わった理由を、以下のように考える。第一に、アイルランド教会員が、歴史的聖パトリック像（信仰の強さ）を見習って教会制度を構築したこと。第二にアイルランドという国家が、血縁的家族共同体を基盤とする氏族制度によってなりたっていたこと。

アイルランド教会において、聖パトリックの時代から現在に至るまで、聖パトリックが最高の指導者である。聖パトリックの後継者たちは、告白における聖パトリックの宣教姿勢、つまり、どんな迫害にも怯むことなく、自らの使命とアイルランド人の救いのために全精力を注ぐ姿に心動かされ、聖パトリックの宣教姿勢を受け継いで、教会制度を構築していった。そのため、アイルランドの修道院運動創始者クロムナード（Clonard, Co. Meath）のフィニアン（Finian）<sup>31)</sup>の著書『贖罪規定所』（Penitentialis Vinniani）<sup>32)</sup>に見られるように、アイルランド教会では、「巡礼」と「殉教」が重要視され、聖パトリックの後継者たちもまた、危険を顧みず神の名を知らない人々に、キリストの教えを伝えることを使命とした。

彼らは宣教活動を行った地に修道院を建て、地域住民の信仰や教育の育成に励んだ。そしてその育成によって、後継者を生むようになる。新たに神の名を知らない人々を求めて、巡礼の旅を続けたのである。<sup>33)</sup> その結果、アイルランドのあらゆる地域に、多くの修道院が創設された。その数は、司教下の教会を上回った。また、アイルランドという国家は、ゲール人が移住してきたB.C.1世紀以来、血縁的家族共同体を基盤とする氏族制度



によって成り立っていた。このように血縁的關係と家父長的支配が強いアイルランドの社会制度は、修道委員長を長とする修道院共同体の理念と類似しており、修道院制度が重んじられた。

このようにアイルランドにおいて、数的に修道院が教会を上回り、またアイルランドの社会制度に適合するという事で修道院制度が司教制度よりも重んじられたことによって、アイルランド教会は司教制度ではなく独自の修道院制度によって組織される。そして、そのことによって修道院は教会以上の力を身に付け、その長である修道委員長は司教をも兼任し、司教としての裁治権を行使する独自の形式が成り立ったのである。

また、アイルランド教会の宣教師たちは、宣教活動の際に聖パトリックが行った<sup>34)</sup>ように、ドルイドの規定によって成り立ったアイルランドの価値基準に合わせて宣教活動を行った。その結果、アイルランドにはドルイドという価値基準に融合したキリスト教が広まり、独自の復活祭の日付生み出したのである。

## II 節 伝承形成に至る原因と時代状況

前節で述べたアイルランド教会が保有する独自性は、ローマ・カトリック教会と出会うことによって、批判の対象となり、このことによって「復活日論争」が起こる。またそれに伴い、聖パトリックの伝記が編纂され、独自性をもたらした原因である歴史的聖パトリック像にも変容が加えられる。本節では、三伝承が形成されるまでの時代状況・伝承作品の特質と目的を述べ、その後、考察を加えたい。

### ① 伝承形成に至るまでの時代状況と二つの初期伝承作品

先述したアイルランド教会の保有する独自性は、「全世界の教会の統一」を目指す教皇グレゴリウス1世<sup>35)</sup>や彼の政策を受け継ぐ後

の教皇たちにとっては、許すことのできるものではなかった。そのため、アイルランド教会は、教皇たちやローマ・カトリック系の他教会から多くの批判をあびる。そのことによって、アイルランド教会内部では、アイルランド教会の独自性を守り通そうとする「伝統派」とローマ・カトリック教会の方式に統一しようとする「ローマ統一派」の二派に分かれて、一世紀にも及ぶ「復活祭論争」が起こる。この論争は、当初より「ローマ統一派」が優位であった。なぜなら、多くのアイルランド教会に属する人々は、アイルランド教会が他国のローマ・カトリック教会から孤立することを恐れたからである<sup>36)</sup>。彼らはローマ・カトリック教会と出会い、自らの教会が保有する独自性を理解すると共に、アイルランド教会はローマ教皇のもとにおけるカトリック教会の一員だということをも再認識したのである。そして当初から「ローマ統一派」を支持する人々が多かったアイルランドの南部教会が632年、逸早く「ローマ方式」を受け入れる。また、664年にはイングランド宣教の中心地ノーサンブリア王国が、ホイットビー教会会議 (Synod of Whitby)<sup>37)</sup>を開催し、この会議でイングランドのアイルランド系教会は「ローマ方式」を採用するとした。しかし、歴史的聖パトリック像を受け継いだ初期宣教師によって創設された北部教会やアイオナ共同体は、アイルランド独自の伝統的信仰を保有し、「伝統派」を支持して、頑なにアイルランド教会独自の形式を守り通そうとした。

このようなアイルランド教会混乱期 (7世紀後半) に、聖パトリックのことを記述した最初の伝承『聖パトリック伝』 (Vita S. Patricii) と『聖パトリックに関する覚え書き』 (Memoranda) が記される。アイルランド教会員たちは、歴史的聖パトリック像

が、この混乱を生み出したにも関わらず、彼らは、この混乱の安定を聖パトリックに託すのである。これら二伝承では、『告白』や『書簡』に欠如している年代、場所、人物、宣教範囲やその背景等が付け加えられている。しかし、これらはアイルランド教会内の口頭伝承やアイルランド各地の民間伝承に依拠しているため史実的に全面的に信頼出来るものではない。

次にこれら二伝承についての特質と目的を述べる。

『聖パトリック伝』(Vita S.Patricii)は、スレティーの司教エー(Aedh)の依頼を受けたアーマー教会の聖職者ムルクーによって書き記される(680年)。この伝承は、『告白』に即して記され、『告白』に欠ける年代、場所、人物、宣教範囲、宣教に至るまでの背景をアイルランド教会内やアイルランド各地に残る口頭伝承を利用して具体性を持たせている。

『聖パトリック伝』は、北部教会やアイオナ共同体等のような「伝統派」に立つ人々に、「ローマ統一派」の意見を受け入れさせ、アイルランド教会、共同体全体がローマ方式を受け入れることを目的とするものである。そのため、この伝承においては、『告白』や『書簡』の中では明らかとされていない聖パトリックとローマ・カトリック教会の関係が明確に示されている。他方、アイルランドにおける修道院制度から司教制度の転換を目論むローマ・カトリック教会は、聖パトリックによって創設されたと伝えられるアーマー教会に、首位司教座の権限を与えた(七世紀後半)<sup>38)</sup>。それによって、アーマー教会の聖職者であったムルクーは、アーマー教会がローマ・カトリック教会より与えられた首位司教座の権限を全アイルランドに承認させ、また、全アイルランド教会は聖パトリックから権限を与えられたとされる首位司教座、アーマー

教会の下にあることをも承させようとしたのである。そのことにより、彼はアイルランド教会を一体化させ、またローマ方式に適する司教制度に変革し、ローマ・カトリック教会からの孤立を防ごうと考えたのである。

ムルクーと同時期か、少し遅れて(680年?/700年?)表わされた『聖パトリックに関する覚え書き』(Memoranda)は、アードブラカン(Ardraccon, Co.Meath)の司教ティレハンによって記される。この書物は、ティレハン自身が「私は司教ウルタンや先輩たちが私に助言してくれたことをもとにしてこの伝承を綴っている。」<Memoranda 18.(1)>と記すように、先代司教ウルタン(Ultan Moccu Conchubair, 657年没)を始め、多くの先輩たちから直接聞いた伝承、アイルランド各地で得た伝承をもとにしたものである。

この伝承において、ティレハンは聖パトリックの宣教活動に重点を置いており、聖パトリックの宣教師程を伝承の中で辿っている。つまり、『聖パトリックに関する覚え書き』は、聖パトリックの「宣教師伝」という正確を持っているのである。その際、彼は出身地であるアイルランド西部のコナハト(Connacht)地方に焦点を当てており、この地方での聖パトリックの宣教師程を詳細に描写する。この伝承が記された当時、アイルランド教会とアイルランドの北部・西部を支配していたイ・ニール一族<sup>39)</sup>等の世俗権力との間で、領地争いが起こっていた<sup>40)</sup>。そのような状況下での、ティレハンの伝承形成目的は、世俗権力に対して聖パトリックの全アイルランドにおける権威を打ち立てることによって、彼に基づくアイルランド教会(特にアーマー教会)の領地や権限の拡大を目指すものであった。また、この伝承も復活祭論争の最中に記されたものであり、ムルクーと同じくローマ・カトリック教会と聖パトリックの関係が記され

ており、全アイルランド教会がローマ方式に転換することも目的とされている。

## ② 初期伝承形成後の状況と新たな伝承形成

先述した二伝承やヨーク（York）の初代大司教エグバード（Ecgbert）<sup>41</sup>の説得によって、696年に北部教会が、716年にはアイオナ共同体が相次いで「ローマ方式」を受け入れ、約1世紀続いた「復活祭論争」は終焉を迎える。これによって、全アイルランド教会は、復活祭の日付、司教の叙階をローマ方式によって行うようになる。しかし、修道院制にもとづく教会制度だけは形を変えて継続される。「ローマ方式」導入や二伝承によってアーマー教会の首位性は、八世紀までにはアイルランドのほとんどの教会に認められ、それらの教会に対して首位司教座の権威を持って裁治権を行使していた。しかし、それと同時にアイルランドでは、依然として大修道院が強い影響力を持ち、修道院制は継続・発展していくのである。このことは、アーマー教会の権威が、復活祭論争時にローマ・カトリック教会から権限を与えられたことと同時に、アイルランドにおいて強大な力を握っている大修道院からも支持されたものであったからである。これによって、アイルランドの教会制度は、修道院制と司教制の二重構造によって組織されるのである。

このようにローマ・カトリック教会やアイルランドの大部分の教会から首位司教座としての権威を与えられたアーマー教会は安定期を迎える。しかし、アーマー教会は首位司教座として大きな権力を得ることが出来たが、他方、多くのアイルランド教会は依然として、アーマー教会と同程度の権力を握る修道院の影響下（＝二重構造）にも置かれていた。彼らは修道院がアーマー教会以上の権力を握り、再びアイルランド教会が修道院制からなり、

ローマ・カトリック教会からの孤立の危機に立つことを防ぐために新たな伝承を作成する。また、それだけで無くこの伝承では、将来に対する様々な願いを聖パトリックに託している。この伝承もまた多くを民間伝承に依拠しているため、史実的に確かだと言い切ることは出来ない。

先述した二書が記された百年ほど後（800年ごろ）に、先述した二つの初期伝承を基礎にし、そこにより多くの民間伝承を組み入れた『聖パトリック伝』（Betha Phatraic）が記される。この伝承は、三部に別れて構成されているため、『三部作伝記』（Tripartite Life of Patrick）とも呼ばれる。

この伝承において、聖パトリックはキリストより神の救済計画を任せられた人物だと全アイルランド人に対して強調される。この伝承では、司教となる以前の聖パトリックの人生は、ほとんど記されておらず、伝承の大部分は、アイルランドにおけるキリストの「救済計画」を委ねられた聖パトリックが、どのようにして宣教活動を行い、どのような成果を上げたかが語られる。7世紀に記された初期伝承によって、聖パトリックはアイルランド教会内部だけでなく、多くの世俗の人々の崇拜の対象となった。この伝承では、『告白』や『書簡』に欠けている時・場所・人物と聖パトリックを具体的に関わらせることによって、また全アイルランド人への救済計画を語り、全アイルランド人の未来を聖パトリックに託すことによって、民族の心をつかみ、彼らの心の内に深く聖パトリックを植え込むことを目的としたものだと考えられる。そして、そのことによって、聖パトリックの権威を受け継ぐアーマー教会は、民衆からの絶大な崇拜対象となり、更なる権威の拡大を図るのである。

## ③ 三伝承に対する考察

先述した三伝承は、それぞれ異なった対象に対して記されたものである。しかし、これらの三伝承は、対象は異なるが、それぞれ異なった対象に対して、全アイルランド教会の創設者、聖パトリックの遺産を彼の聖性と活動の中に示すことによって、聖パトリックの権威を受け継いだとされるアーマー教会の裁判権の首位性を位置付けようとしている。そしてそうすることによって、混乱期の安定を目指し、将来への不安を拭い去ろうとする目的を持っているのである。

### 第3章 伝承的聖パトリック像

三伝承の中では、『告白』に示される聖パトリックの持つ「弱さ」は、全く打ち消されている。このことは、彼の持つ弱さが三伝承共通の目的を達成する上で、不都合だったために消去されたのではないだろうか。それだけでなく、7世紀の初期伝承形成に至るまで、人間的弱さを保有しながらも、信仰的強さでそれに打ち勝ち、アイルランド改宗に尽くした「歴史的聖パトリック像」は、多くのアイルランドの教会員から共感を受け、人々の心を揺り動かした。そのように、アイルランド教会員たちにとって、聖パトリックが重要な存在になり、彼に対して混乱期の安定と未来への願いを託したからこそ、三伝承の中で、聖パトリックは、微塵も弱さを見せず、どんな時にも力強く、あたかも不可能なことの無いような神々しい存在として美化される。つまり、三伝承における聖パトリック像は、表面上に見えるもの（歴史的聖パトリック像）ではなく、アイルランド教会員たちの心の奥底にある聖パトリックに対する願いなのである。本章においては、伝承形成の目的が集約された「司教となる以前の聖パトリック」、「世俗権力との関わり」、「神との約束（聖パトリックによる罪の贖い）」の三項目に焦点

を当てて、伝承的聖パトリック像を考察する。

#### I節 司教となる以前の聖パトリック—高度な学識を保有する聖パトリック—

ムルクーの『聖パトリック伝』において、聖パトリックの霊的養成の地と司教職就任の背景を以下のように述べている。聖パトリックはキリストと同じく30歳近くに達した頃、家族のもとを離れて、霊的生活に入る。彼はまず「ブリタニアの南から海を越え、そしてガリアを通過していた」<Vita. I 6.(1)>。その時、彼は「アルプス山脈を越えて、ローマに辿り着きたいという熱烈な願い」<Vita. I 6(5).(1)>を持っていた。しかし、その旅路の途中で「信仰と学問において高名な聖なる男、オクセールの司教、全ガリアの指導者、大祭司ゲルマヌス」<Vita. I 6(5).(1)>に出会い、彼のもとで霊的養成を受けることを決意する。そして彼はゲルマヌスのもとで、「忍耐強く、従順な姿勢」<Vita. I 6(5).(2)>で、「愛、実践的知識、学問、純潔、精神と魂の善の性質」<Vita. I 6(5).(2)>を学んだ。

聖パトリックは、ゲルマヌスのもとで、かなりの多くの期間を霊的養成の期間として過ごした。その期間を「ある者は40年と言い、他の者は30年と言う」<Vita. I 7(6)>。そして40年、あるいは30年、ゲルマヌスのもとで過ごしたある日、聖パトリックは、幻覚の中で聖霊ヴィクトリクスから「フォクラーの森の息子たちや娘たちがあなたを呼んでいます…」<Vita. I 7(6).>というアイルランド宣教の示唆を与えられる。この聖霊ヴィクトリクスの言葉によって、聖パトリックはアイルランド宣教を決意する。そしてゲルマヌスは、聖パトリックがまだ司教職を得ていなかったために、証人として先輩であるセギティウス(Segitius)を同伴させ、聖パトリックと共にアイルランドへと派遣した。聖パトリック

とセギティウスがアイルランドへと向かおうとしたその時、彼らはアイルランド初代司教パラディウスの死の報告を受けた。そして、聖パトリック一行は、急遽行き先を変更して、大司教アマソレックス (Amathorex)<sup>42)</sup>のもとへと向かう。そして、聖パトリックは彼からアイルランド司教の叙階を受け、アイルランドへと出発する。

次に、ティレハンの『聖パトリックに関する覚え書き』には、以下のように述べられている。22歳の時に、聖パトリックは、ドルイドの支配を逃れアイルランドを後にする。その後の7年間で、「聖パトリックは苦難の中で、陸を旅し、海を航海し、ガリアの山々や丘陵を越えて、イタリアの全ての地域や、ティレンヌ海の島々を巡った」<Memo. III. I. 1. (6)>。そしてその後、聖パトリックは「これらの島々の一つであるアララネシスと呼ばれる島で30年間滞在した」<Memo. III. I. 1. (6)>。そして聖パトリックはこの地において、司教となるための霊的養成に励んだとされる。この地における30年の霊的養成の後、聖パトリックは「ローマ皇帝テオドシウスの30歳の時、使徒ペテロから始まる45代目のローマ教皇ケレスティヌス1世によって、スコット人にキリスト教を宣教するためにアイルランドに派遣される」<Memo. III. 6. 56. (2)>。教皇ケレスティヌスは聖パトリック以前にパラディウスをアイルランドに派遣していたため、本書では聖パトリックは教皇ケレスティヌス1世に派遣された「二番目の司教」<Memo. III. 6. 56. (3)>だとされる。

『三部作伝記』は、以下のように記される。聖パトリックは、「二人の姉妹ティグリス (Tigris) とルペイト (Lupait)」<sup>43)</sup>と共に捕らえられ、アイルランドで「ダラライドの王ミルーク」<sup>44)</sup>に奴隷として売られる。彼は7年間、ミルークのもとで働くが、「天使ビクター

(Victor)」に導かれ、奴隷生活から逃れ、故郷であるブリタニアに戻る。ブリタニアに戻った聖パトリックのもとに、再び天使ビクターが現れ、彼にゲール語で書かれた多くの手紙を渡した。彼がその手紙を読もうとしたその時、彼はアイルランドの子どもたちの「全てのアイルランド人のために来て下さい、聖なるパトリック」<sup>45)</sup>という声を聞く。聖パトリックは、この声によってアイルランド宣教を決意し、霊的養成のために家族のもとを旅立つ。まず彼は「イタリアの南東部で知恵と敬虔さを学び」<sup>46)</sup>、その後、オクセールの司教ゲルマヌスを訪ねる。聖パトリックは、「ゲルマヌスのもとに30年間留まり、聖書や法の知識を学び、謙虚な姿勢でそれを完全に習得した」<sup>47)</sup>。彼はゲルマヌスのもとで学んだ後も、霊的養成を続け、アララネシス島などの地域で多くの知識を身につける。このように、多くの霊的生活を過ごし、多くの知識を身に付けた聖パトリックは、アイルランド司教パラディウスの死の報告を受けた教皇ケレスティヌス1世によって、パラディウスの後任としてアイルランドへ向かうことを命じられる。しかし、聖パトリックは「主がそうすべきだと語られるまで、アイルランドに行かない」<sup>48)</sup>と、その命令を断る。その後、天使ビクターの導きによって、ティレンヌ海の沿岸にあるアルモン山 (Armon) に辿り着いた聖パトリックは、「主がモーセにシナイ山で語られたように、主は (この地で) 聖パトリックに宣教するためにゲールに行くこと」<sup>49)</sup>を命じられる。そして、そのことによってアイルランドへと向かう決意をするのである。

三伝承における聖パトリックの霊的養成の地と司教職就任の背景は以上の通りである。それでは、次にこれらより伝承的聖パトリック像を考察する。

ムルクーの『聖パトリック伝』と『三部作

伝記』は、共に靈的養成の地をガリアだとしている。それに対して、ティレハンの『聖パトリックに関する覚え書き』は、ティレンヌ海のアララネシス島だとしている。また、聖パトリックに司教職を与えたのは、『聖パトリック伝』においては大司教アマソレックス、『聖パトリックに関する覚え書き』、『三部作伝記』においてはローマ教皇ケレスティヌス1世とされている。これらの三伝承における異なりは、20世紀の聖パトリック研究における論争事項となっており、現在においてもカトリック側の「伝統派」とプロテスタント側の「反伝統派」に分かれてその論議は続く。

先述したように靈的養成の地は、三伝承においてガリアとアララネシス島と異なりを見せる。しかし、ティレハンが「(靈的養成の後) 祭司パトリックとイセルニウスは、アウケッレ (Auxerre) で、ゲルマヌスと共にいた。」<sup>50)</sup>と語っていることから、ティレハンの書においても聖パトリックとゲルマヌスとの関係が述べられている。

これについて、P.グロジャンは独自の資料を用いて、アララネシス島はゲルマヌス創設の修道院跡がある現在のヨンヌ川 (Yonne River) のレ・アイル (Les・Isles) であり、聖パトリックはそこで靈的養成を受けていたと指摘している<sup>51)</sup>。したがって、ティレハンの書においても、直接では無いが間接的な靈的養成の指導者はゲルマヌスなのである。このように、三伝承全てにおいて聖パトリックの靈的養成の師はゲルマヌスだとされるのではあるが、それでは実際にそれが事実であるのだろうか。

これについては、C.モールマンが「パトリックのラテン語やキリスト教学の知識について『告白』や『書簡』の表現から見て、ガリア有数の学問の府オクセルのゲルマヌスの下で長年勉学したことの影響は薄い」<sup>52)</sup>と指摘

しているように、事実では無いように思われる。それではなぜ三伝承においてそのように記されたのであろうか。それについて、次のように考えられよう。アーサー教会の裁治権の首位性を全アイルランドに承認させ、アイルランド教会を一体化させるためには、アーサー教会がよって立つ聖パトリックは神々しくなくてはならない。しかし、『告白』や『書簡』に見られる弱さを持つ歴史的聖パトリック像はそれには適さない。そのために、アイルランドにおいても、この当時既に、学問に長けている事が広く知られていたゲルマヌスを師とすることで、彼の所有する一つの弱さ、「学問に対する劣等感」を消し去ろうとしたのではないだろうか。また、ゲルマヌスを師とすることにはもう一つの理由があったように考えられる。アーサー教会が、首位性を主張するのは、聖パトリックがローマ・カトリック教会から正式に司教として派遣されているからだと主張する。しかし、『告白』や『書簡』にはこの言及は見られない。そのため、聖パトリックの師をゲルマヌスだとしてことによって、教皇ケレスティヌス1世によるゲルマヌス、パラディウスのイングランド、アイルランド派遣の後任に、聖パトリックを置き、聖パトリックの派遣はローマ・カトリック教会の正式なものだとしたのではないだろうか。上述したように、三伝承において聖パトリックは、ゲルマヌスのもとで長い年月学問に励み、聖書や法律の知識を完全に習得した高度な学識を所有する存在として描かれ、正式のローマ・カトリック教会から派遣された司教として記される。

## II節 世俗権力との関わり—神力的に満たされた聖パトリック—

『聖パトリック伝』、『三部作伝記』において、聖パトリックと世俗権力が最も深く関係

する出来事とは、アイルランドにおいて行われた最初のイースターであった。聖パトリックが、アイルランドにおいて最初のイースターを祝った丁度その日に、イ・ニール一族<sup>53)</sup>やドルイド<sup>54)</sup>たちによって、定期的に開かれていた異教徒の崇拜する祭(『三部作伝記』においてはこの祭りを<ターラの祭り (Feis Temra)><sup>55)</sup>と呼ばれている。)も祝われていた。二伝承はキリスト教最大の祝祭イースターとアイルランドにおける異教最大の祝祭「ターラの祭り」を同一日にすることによって、聖パトリックと世俗権力、キリスト教信仰とドルイド尊敬・崇拜を関係させるのである。

二伝承はこの二つの祝祭の出来事を以下のように語っている。聖パトリックは、イースターを迎えようとする前夜、「一年の中で最も重要な儀式、つまりイースターの祝祭は、アイルランドの偶像崇拜者や魔術師の長たちが、居を構える場所ブレーガ、別名ターラ以上に適する場所はない」<Tri.><sup>56)</sup>と考えていた。ブレーガは、以前イ・ニール一族が都としていた都市である。しかし、聖パトリックの宣教時は、すでに都としては用いられていなかったが、イ・ニール一族発祥の地として崇められ、ドルイド尊敬・崇拜の首座となっていた都市である。それゆえ、聖パトリックも先述した考え(異教の中心地でイースターを迎えるべきである)によって、祝祭を迎えるために、ブレーガに向かった。そして彼はブレーガにあるフィアック(Fiaccu, リーレ王の曾祖父)の奴隷たちによって作られた埋葬地に辿り着き、そこでイースターの聖なる火を灯した。

聖パトリックがイースターの火を灯したこの日、異教徒たちも「ターラの祭り」の前夜を迎えていた。この祭りには、アイルランド各地より「王・長官(Satrapes)・指導者・王子などの高貴な人々、更にドルイド・預言

者・発明家・技術者など全ての知識を伝える人々」<Vita. I 15(14).(2)>が集まり、祭りでは「呪文が唱えられ、魔術的儀式や偶像崇拜の迷信的行動」<Vita. I 15(14).(1)>が繰り広げられていた。

この「ターラの祭り」には、イ・ニール一族によって、アイルランド全土に公布された決まりが存在した。その決まりとは、「ターラの祭りの火が<王宮に>灯される以前に、火を灯してはならない。」<Tri.><sup>57)</sup>というものであり、もし人々がこの決まりを破れば、人々は「王によって、死刑に処された」<Tri.><sup>58)</sup>のである。

決まりを破り、聖パトリックによって灯されたイースターの火は、平原に住むほとんどの人々に目撃され、当然ターラでも見られた。しかし、この光景に激怒したリーレ王は、聖パトリックを捕らえるために、「九頭だての三つの馬車で、最も力強いとされた二人のドルイド、ルケット・マエル(Lucet Mael)とロクル(Lochru)」<sup>59)</sup>を連れて、「夜通し、フィアックの埋葬地に向けて歩を進めた」<Vita. I 16(15).(2)>。彼らは夜明け前に、埋葬地の外に辿り着いて、そこに腰をおろし、決して埋葬地の中に入ろうとはしなかった。なぜなら、彼らによって、「[イースターの]火によって灯された場所には入ってはなりません。もしそうすれば、後にあなたたちは火を灯した男を崇拜するからです。」<Vita. I 16(15).(3)>とお告げを受けていたからである。従って、彼らは埋葬地の外から、聖パトリックに呼びかけ、聖パトリックはその呼びかけに答えて、彼らの前に現れた。聖パトリックは、全く恐れ慄かず、不敵に笑みを浮かべながら「この者どもは、馬や戦車を信頼している。しかし、私は偉大なる主の御名を信頼する」<Tri.><sup>60)</sup>と語った。そこで、ドルイドの一人ロクルは、聖パトリックを挑発し、主

なる神を罵った。聖パトリックは、この言葉を聞いて、力強く、かん高い声で主に語りかけた。その瞬間、ロクルの頭は地面に叩きつけられ、粉々に砕け散った。

その出来事に激怒した王の兵士たちは、一斉に聖パトリックに襲い掛かろうとした時、再び聖パトリックは神に語りかけた。「神よ、お願いします。あなたの敵を破滅させ、あなたの不幸を願う者を、消し去ってください」<Vita. I 18(17).(2)>と。聖パトリックがこのように語りかけると、あたりは暗闇に包まれ、異教徒たちの仲間割れが起こり、大地震が起こった。そして、神の罰は朝になるまで続けられた。この神の罰から逃れ、ターラの城へとかろうじて逃れる事が出来たのは、リーレ王、ドルイドのルケット・マエルとその部下たちの四人だけであった。

翌日、聖パトリックはアイルランド全土から集まった人々に、真の信仰を説くために、五人の仲間と共に「閉ざされた扉を通して〔ターラ城の中に〕入っていった」<Vita. I 19(18).(2), Jone20:19>。異教徒たちはターラ城を訪れた聖パトリックを試すために共に食事をすることを求めた。これに応じた聖パトリックには、毒入りのぶどう酒が注がれた。聖パトリックは、そこにいる全ての人々の前で、ぶどう酒を祝福すると、ぶどう酒は凍り、その中から毒の滴だけがテーブル上へと落ちた。その後、前夜の出来事と、そしてこの光景に驚いたリーレ王は、聖パトリックの聖なる力とドルイドの魔術を競わせた。

ドルイドは魔術によって、世界の北の果てから人々の生活に困窮をもたらす雪や霧を呼び寄せた。彼は同じ事を聖パトリックにも要求するが、「私は神の意志に反する何もものも持ってきたくはありません」<Vita. I 20(19).(3)>とその要求を拒絶した。さらに、聖パトリックはそれらが人々に有害であるた

め、ドルイドに雪や霧を消すことを要求した。しかし、ドルイドは「明日のこの時間まで、私はそれらを取り除くことは出来ない」<Vita. I 20(19).(4)>と答えたので、聖パトリックはこのドルイドに代わって、雪を溶かし、霧を晴らした。そしてそれに続けてこう言った。「あなたは悪いことは行えるが、良いことは行えない。しかし、私はそうでは無い」<Vita. I 20(19).(4)>と。

ムルクーはこれら二つの力と働きを併記することによって、聖パトリックの奇跡の力を「善」、ドルイドの魔術の力を「悪」と規定している。そして、聖パトリックの奇跡の力が善であるからこそ、彼は人々の害となる雪や霧を呼び寄せることが出来なかったと記す。それに対し、ドルイドの魔術の力が悪であるからこそ、ドルイドは人々の害となる雪や霧を消すことが出来なかったのであると綴る。

この二伝承における二つの祝祭の出来事は以上の通りである。それでは、次にこれらより伝承的聖パトリック像を考察する。ムルクーや『三部作伝記』の著者は、伝承の中で二つの祝祭を同日にすることによって、聖パトリックと世俗権力、キリスト教とドルイド尊敬・崇拝を関係させている。ムルクーが伝承形成に取り掛かった7世紀、アイルランドではイ・ニール一族の勢力が絶頂をむかえ、アイルランドの北部・中央部を制圧していた。また、人々の崇拝の対象はドルイドからキリスト教へと変わりはじめていたが、依然としてドルイドによって広められた生活全般に渡る知識は、アイルランドの土壤に深く浸透し、アイルランドの人々はこれらを保有、継承していた。

このようなイ・ニール一族の勢力やドルイドの知識が大きな影響力を持つ7世紀、ムルクーはアイルランド各地で口頭によって伝承されていた「二つの祝祭の出来事」を利用す



ることによって、聖パトリックの奇跡の力・キリスト教の教えがイ・ニール一族の武力やドルイドの魔術や知識・技術以上のものだと述べる。そうすることによって、彼はアイルランドの土壌に深くキリスト教・聖パトリックの言行を浸透させ、アーサー教会の裁治権の首位性を他教会に容認させようとしたのである。そして、9世紀に記された『三部作伝記』の中にある「二つの祝祭の出来事」も、アイルランド全土にキリスト教を更に浸透させる役割を果たすものである。

しかし、聖パトリックによって記された『告白』の中に見られる聖パトリックは、世俗権力に悩まされている。上記の『告白』の中で、聖パトリックは、「彼ら〔王やドルイド〕が私を殺したいと熱望していた」(Conf.52)と語っている。しかも、『告白』における聖パトリックは、伝承に記されるように、様々な奇跡的力によって、世俗権力やドルイドを打ち倒すことは無かった。聖パトリックは、彼らに「捕らえられ」(Conf.52)、「鉄格子に入れられ」(Conf.52)、監禁された、とそこで述べる。それではなぜ二伝承において聖パトリックは、奇跡的力を保有したのであろうか。それは以下のように考えられよう。

聖パトリック宣教から7世紀に至るまで、『告白』の中に見ることの出来る歴史的聖パトリック像、つまり表面的には世俗権力に立ち向かうことが出来ないが、その弾圧に対して不屈なまでに信仰や使命や希望(キリストを信じたい・神に託された使命を全うしたい・アイルランドの人々を救済したい)を持って耐えつづける彼の姿に多くのアイルランド教会員たちは共感したのであろう。そして彼のこのような姿、彼の宣教姿勢を継承していった後継者たちの姿に多くの人々の心が揺り動かされてたからこそ、紀元前からドルイド尊敬・崇拜を保有し続けてきたゲール人の「国

家」アイルランドが、わずか二百年でキリスト教「国家」となった。実際に聖パトリックは世俗権力と向き合い、彼らを打ち負かすことは出来なかったが、彼の宣教姿勢は二百年という歴史の中でイ・ニール一族やドルイドを凌駕したのである。7世紀の伝記記者ムルクー、9世紀の『三部作伝記』の著者は、この奇跡的出来事、キリスト教の発展・隆盛を目の当たりにしていた。だからこそ、彼らは、伝承において聖パトリックを様々な奇跡を行う、神々しい力に満たされた存在として描くのである。またそれだけでなく、アーサーの首位権を承認させるために、さらに聖パトリックを絶対的崇拜の対象とするために、表面的無力さを拭い去りたいとの願いも勿論あったと思われる。上述した二伝承は世俗権力との関係において聖パトリックを様々な奇跡を用いる、神的力に満たされた存在として表わされるのである。

### Ⅲ節 全アイルランド人に対する聖パトリックと神との約束—全アイルランド人の救い、聖パトリック—

『聖パトリック伝』における、聖パトリックと神との約束は以下の通りである。聖パトリックの死が間近に迫ったある日、天使は死の報告をするために、聖パトリックのもとを訪れた。そしてその報告を受けた聖パトリックは、最期を迎える場所として、「他のどこよりも愛する場所」<Vita. II 4.>アーサーへと向かった。しかし、その途次、天使ヴィクトリクスから送られた天使が聖パトリックのもとを訪れた。そしてその天使は天使ヴィクトリクスの指示を聖パトリックに伝えた。「ソウル(Saul)へと戻りなさい。そうすれば、あなたが願う要求が〔神より〕与えられるでしょう」<Vita II 5.(2)>と。

その要求とは、アイルランドの人々の訴え

の形式でなっているが、次のようなものである。「身体から彼〔聖パトリック〕の魂が遊離するその日に、彼のために讃美歌を歌う全ての人々が、〔自らの死の時に〕それぞれの罪の償いに応じてあなた（＝聖パトリック）から裁きを受ける。」<Vita. II 6(5).(1)>、「〔最後の審判の日に〕使徒たちが〔イエス・キリストより〕『あなた方は座して、イスラエル十二部族を裁くであろう』と語られたように、全てのアイルランド人は、〔最期の審判の日に〕あなた〔聖パトリック〕より裁きを受ける。」<Vita. II 6(5).(3)>など。聖パトリックは、天使ヴィクトリクスの指示に従い、ソウルへと戻って行った。そしてそれに伴い聖パトリックの要求、アイルランドの人々の罪からの救い・最期の審判における贖いが、神によって約束された。以上が『聖パトリック伝』における全アイルランド人に対する神と聖パトリックの約束である。

次に『三部作伝記』においては、神と聖パトリックの約束は以下のような出来事の中で記されている。聖パトリックは、クローハン・アール（Cruachan Aigle, 別名リック <Rick>）と呼ばれる山に、四旬節（Quadragesima）の土曜日にやって来た。天使もまた彼に神の意志を伝えるためにそこを訪れた。天使は聖パトリックに言った。「汝の要求するものは、余りにも法外で、突飛なものだ。神はその要求を受け入れない」<sup>61</sup>と。しかし、聖パトリックは神のこの言葉を聞いても引き下がろうとはせず、「私は私が死ぬ以外、私の要求が受け入れられるまでここリックから離れることは無い」<sup>62</sup>と語った。そして聖パトリックは、断食して、懺悔（＝灰の水曜日）の土曜日からイースター前の土曜日までグローハンに留まった。そしてクローハン滞在の40日目の夜、黒い鳥の群れが現れた。

聖パトリックは、この鳥たちを追いやるために、詩篇の呪いの言葉（「早く死んでその名も消えうせるが良い」Psalms41:6）を唱えたが、鳥たちは立ち去らなかった。聖パトリックは鳥たちに激怒し、手に携えていた鐘を投げつけた。そして、顔と祭服がびしょ濡れになるほど、彼は号泣した。天使はこの光景を見て、余りにも哀れだと感じ、彼を慰めるために再び彼のもとへとやって来た。天使は聖パトリックの祭服を清め、リックに白い鳥を放ち、その鳥たちは聖パトリックの耳元で優しく囁いた。そして天使は聖パトリックが要求したことの一つを受託しようと彼に語った。それに対して、聖パトリックは「地獄の苦痛から毎週木曜日に七人、毎週土曜日に十二人が救われる」<sup>63</sup>ことを要求した。天使は、「それではそのようにしましょう。ですから、汝はすぐにリックより離れなさい」<sup>64</sup>と答えた。しかし、聖パトリックは「私はそのようにはしないでしょ。私は祝されるまで、苦しみ続けるのだから」<sup>65</sup>と答える。そして、聖パトリックは、新たなる要求が受託されるように、さらに天使に語りかける。このようなやり取りが繰り返される中で、天使は下記の事を受託していった。その受託された要求とは、「私〔聖パトリック〕が天に留まる限り、契約や軍事力によって、サクソン人は決してアイルランドに住まない〔事〕」<sup>66</sup>、「汝〔聖パトリック〕の賛歌を歌うものは誰でも、決して苦痛や拷問を受けない〔事〕」<sup>67</sup>、「汝〔聖パトリック〕の名において、良い行いをする者の魂や、アイルランドで自らが犯した罪を償う者の魂は、地獄へ向かわない〔事〕」<sup>68</sup>、「汝〔聖パトリック〕の祭服を受け継ぐ全ての人々〔アイルランドのキリスト教徒〕は、汝によって最期の審判の苦しみから逃れることが出来る〔事〕」<sup>69</sup>、「（最後の審判の）時に、私〔聖パトリック〕自身がアイルランドの人々

を裁く〔事〕<sup>70)</sup>など。そして天使だけでなく神もまた彼にこう語った。『これまでもこれから使徒以上に崇められる人間はいない。しかし、汝（聖パトリック）の頑固さに応じて、あなたの祈ったことをその通りにしよう』<sup>71)</sup>と。神のこの言葉によって、全ての要求を受け入れられた聖パトリックは、感激の余り跪いたままリックを這い降りた。『三部作伝記』における神と聖パトリックのアイランド人に対する約束の出来事は以上である。

それでは次に、これら二伝承における「全アイランド人に対する神と聖パトリックの約束」の出来事から、伝承的聖パトリック像を考察する。9世紀に記された『三部作伝記』における神と聖パトリックの間で交わされた多くの約束は、7世紀に記された『聖パトリック伝』における約束と『聖パトリックに関する覚え書き』に見ることの出来る「聖パトリックの願い」と呼ばれるアイランドの人々の願いをも含む。さて、「聖パトリックの願い」については、まだ説明を加えていないのでここで説明する。「聖パトリックの願い」とは、現在でもアイランドの人々に継承されるものであり、終末時や未来のアイランド人の願いを聖パトリックの口によって代弁させたものである。ここには「第一に、もし人生が裁かれる最期の審判までに、自らの罪を償うのであれば、そのような全ての人々は、神に受け入れられ、地獄に投じられることは無い。第二に、多民族が私たちが支配することは永遠に無い。」<sup>72)</sup>と記されている。このアイランドの人々の願い（聖パトリックの願い）は、『聖パトリック伝』に見られる「アイランド人に対する神と聖パトリックの約束」の伝承と結び付けられて、終末時、未来への不安や願いを聖パトリックに託す形で9世紀の『三部作伝記』に記される。それではなぜ、

アイランドの人々は終末時や未来にこれほどの不安を抱え、これらの不安を『三部作伝記』の中で、人間的弱みを保有する聖パトリックに託したのであろうか。そのことは以下のように考えられよう。

修道院時代に重要視された「殉教」において、他人の罪を贖うことが重要視された。このことによって、アイランドの多くの人々は終末や未来に異常なまでの関心や不安を持った。そしてそれは、アイランドにおいて修道院が創設された6世紀からイングランドに支配される12世紀までに発刊された神学的著作の大多数が終末論的要素を含むものであった<sup>73)</sup>ことから理解することが出来る。その中でも、特に彼らの関心の中心は、「最後の審判」と「贖罪」に向けられていた。しかし、これほどまで、多くの終末論的な書物が書かれていたにも関わらず、20世紀の神学者B・グローガン（Brian Grogan）が語るように、ローマ領域から遠く離れ、神学的知識が伝承されることの無かったアイランドにおいては、「（終末論を）体系的かつ総合的に提示するに至っていない。それに応じる組織神学も発達していなかった。彼らは人間の思考を超える終末時事象に肉付けを与えるために、旧・新約聖書を利用し、聖書に欠ける点は想像によって独自の終末論を構築したのだ。」<sup>74)</sup>

アイランドの人々は、組織神学が発達しなかったことにより、独自の方法で終末論を構築した。彼らは聖書に欠ける点を、想像によって聖パトリックの贖いに託し、独自の終末論を構築したのである。『告白』に見ることの出来る歴史的聖パトリック像は、7世紀の伝承作成に至るまで、多くのアイランド教会員たちの心を揺り動かした。どんな蔑みや迫害にあっても、アイランドの人々を救うために、宣教活動に励んだ彼の姿勢が多く

の教会員にとって、崇拜の対象となった。そして、7世紀に記された二つの伝承作品によって、聖パトリックは、教会員だけでなく世俗の人々の心をも捉えていった。

『三部作伝記』における、神への要求の際に、聖パトリックが繰り返し発する言葉、「私は祝されるまで、苦しみ続けるのだから」は、彼に対するアイルランドの人々の信頼を高めさせてゆく。アイルランドの人々は、聖パトリックは死に至るまでアイルランドの人々の罪を償ってくれた存在だと、彼の宣教活動から、また、彼のアイルランドへの愛から信じられる。このような彼に対する信頼と尊敬から、アイルランドの人々は、彼らの最大の関心事であり、最も実存的で、不安な出来事である終末時や未来において、ひたすら聖パトリックの贖いを願った。そして彼らのこのような願いによって、9世紀、「全アイルランド人に対する神と聖パトリックの約束」の出来事は『三部作伝記』に収められたのである。かかる伝承において、聖パトリックは、アイルランド人の終末時や未来に対する究極的願いを実現させ、実存的不安と恐怖を拭い去る「救いの存在」として形作られていたのである。

## 結論

全アイルランド人が、7世紀から現在に至るまで、絆として保有し続ける二つの聖パトリック像とは、アイルランド人にとって、一方は自らの現実を映し出す聖パトリック像（イエス像）であり、他方は、自らの理想を反映させた聖パトリック像（キリスト像）だと言うことが出来る。そしてこれらは共に苦難の歴史の中で、アイルランドを強め、支え、希望を与える、なくてはならない存在である。「歴史的聖パトリック像（イエス像）」、すなわち、弱さを保有しながらも、常に神との関

係に生きることによって、神に強められ、支えられ、いかなる迫害や批判に屈することなく、宣教活動に邁進することのできる、この「信仰的強さ」を獲得した「像」は、多くの苦難にさらされてきたアイルランド人に対して勇躍、服従など様々なものをもたらしてゆく。アイルランドの人々は、自分たちと同様、多くの迫害や批判、蔑みの中にあつたこの「歴史的聖パトリック像」を見習い、この「歴史的聖パトリック像」を通してパレスチナに生きたイエスの姿をも見た。その聖パトリックへの尊敬、また、イエスへの信従は彼らも常に神との関係に生き、神に全てを委ね、多くの苦難の歴史の中で、神に強められ支えられてきたことを実感させていった。したがって、「人間的弱さ」と「信仰的強さ」を併せ持つ「歴史的聖パトリック像」は、全アイルランド人の現実の人生を映し出しつつ、信仰的服従・力・希望となるものであった。

一方、神々しく聖化された「伝承的聖パトリック像（キリスト像）」は苦難と迫害に耐え、それを越えて、強められ、そして神の栄光を賛美する、雄々しい「聖パトリックの姿」である。それはまた、同時にアイルランドの人々の「信仰的願い」を凝縮するものである。

アイルランド教会混乱期（7世紀）において、聖パトリックの後継者たちは、この混乱期を打破するために、聖パトリックを記した初期伝承作品を作成した。この中で、聖パトリックは神々しい存在として美化される。これはただ単に、アーサー教会の裁治権の首位性を全アイルランドに承認させ、アーサー教会の下に全アイルランド教会を統一させ、また、司教制からなるアイルランド教会を構築する上で、聖パトリックが保有する弱さが不都合だったためだけではない。ここには、聖パトリックの奥底に奇跡の力を見た後継者たちの強い願いが込められている。表面的には

弱さを抱え、世俗権力やドルイドに力で立ち向かえなかった聖パトリックではあったが、彼の宣教からわずか二百年で、キリスト教はドルイドを超える信仰・崇拜の対象となり、また、いかなる世俗権力をもしのぐ影響力を保有するようになった。

この「勝利の道程」の目撃者であった後継者たちはこの中に聖パトリックの奥深くに潜む奇跡的力、「罪をも、死をも打ち滅ぼし、救いと、永遠なるいのちを与える存在の力」（キリスト像）を見た。だからこそ、「伝承的聖パトリック像」は、神々しい存在として描かれるのである。そして後継者たちはこの「聖パトリック」の奇跡的力、救済力をもって、7世紀混乱期の解消と、「希望あふれる未来、救いの内におかれる終末」をこの聖パトリックに託し、「伝承」を記したのである。この後継者たちの願いを込めた「伝承作品」が記されることで、かかる願いは記述者たちだけでなく、全アイルランドの人々のものとなっていたのである。奇跡的力を持ち、救いにも携わる「伝承的聖パトリック像」は、未来や終末への不安を抱えるアイルランドの人々を勇気づけ、希望あふれる「明日のアイルランド」創出の絆、お互いに強く結び合せて、前へと歩ませる推進力、多くの困難を彼らに乗り越えさせ、励ます「導き手」となっていた。二つの「聖パトリック像」は今日もまた、「希望の光」として輝き、「力」となって励まし、慰めている。

本稿を記すことで、「神との関係」を希薄とさせる現代、「他との強調・連帯」よりも、「個人主義」を尊ぶ現代人、そして「生きる意味も、役割」も見つけにくく、「自己受容」もままならない私たちは、二つの聖パトリック像の分析、考察を通して、多くの教示と反省をあたえられたことだろう。

- 1) この法律は、カトリックの土地所有権に対するものであり、カトリックの影響力を減少させることを意図していた。
- 2) O'Connell, Daniel (1775-1847) アイルランド政治家。アイルランド独立運動を、カトリックの勢力を糾合しつつ推進した。カトリック協議会を組織し(1823)、終始、合法的手段をもって、カトリックの解放のために戦った。国会議員として、ローマカトリック解放条例を成立せしめた。(29)
- 3) A. B. E. Hood (ed.& trans.), St. Patrick-His Writing and Muirchu's Life, History from the Sources, London, 1978, pp.41-54 .
- 4) Ibid., pp.55-.
- 5) Coroticus 近年までブリタニアの一地域の君主と見られていたが、現在はアイルランドの小王だと考える (E. A. Thompson, St.Patrick and Coroticus, Journal of Theological Studies, N.S., 31, 1980.) 学者が多い。
- 6) Muirchu アイルランドの南東部を領土とするモックタネー族の一員であり、アーマーの聖職者であった。
- 7) L. Bieler, The Patrician Texts in The Book of Armagh, Dublin, 1979, pp.61-121. 後の注より The Patrician Texts に省略。W. Stokes (ed. and trans.), The Tripartite Life Of Patrick, Dublin, 1965, pp.301-351
- 8) Tirehan アードブラカンの司教。先代の司教ウルタンを通して直接聞いた伝承と、ウルタンの残した書物及びアイルランド各地より得た伝承によって『聖パトリックに関する覚え書き』記す(680? / 700?)。
- 9) Bieler, The Patrician Texts, pp.122-165.
- 10) W. Stokes (ed. and Trans.), The Tripartite Life Of Patrick, Vol.1~2, Dublin, 1965, pp.428-489
- 11) Annals of Ulster 8世紀中期以降に、アイルランドで起こった全ての歴史を記録した年代記。しかし、8世紀以前の記録は、これもまた口頭伝承に依拠しているため史実的に確かだとは言えない。
- 12) James Henthorn Todd (1805-1869) アイルランド聖公会の聖職者であり、ロイヤルアイリッシュアカデミー総裁やトリニティー・カレッジ・

- ダブリン教授を歴任する。
- 13) J. H. Todd, *St. Patrick, Apostle of Ireland*, Dublin, 1864.
- 14) Germanus (380-448) オーセールの主教(418)。ペラギウス派を説伏するため教皇ケレスティヌス1世によってブリヤニアに派遣され、彼らを沈黙させた。
- 15) Coelestinus (-432) 1世教皇(位422-32) ローマ会議でネストリオス主義を排斥、エペソ総会議に3人の教皇使節を派遣して、ネストリウス主義を排して、ペラギウス主義を斥けた。ブリタニアヘゲルマヌスを派遣し(429)、アイルランドにはパラディウスを派遣して、両地のペラギウス主義を押さえた。
- 16) Palladius (-432)パトリックの二つの初期伝承やアルスター年代記において、431年にペラギウス対策のために教皇ケレスティヌスからアイルランドに派遣された初代司教だとされる。
- 17) M. F. Cusac, *The Life of St. Patrick, Apostle of Ireland*, London, 1869;Fr. Gaffney, *The Story of St. Patrick for Boys and Girls*, Dublin, 1890etc.
- 18) J. B. Bury, *The Life of St. Patrick and His Place in History*, London, 1905.
- 19) L. Bieler, *The life and Legend of St. Patrick*, Dublin, 1949.
- 20) E. MacNeill, *St. Patrick*, Dublin, 1964.
- 21) J. Ryan, *The Tradition View of St Patrick*, Dublin, 1931.
- 22) T. F. O' Rahilly, *The Two Patricks*, Dublin, 1971.
- 23) J. Carney, *The Problem of St Patrick*, Dublin, 1973.
- 24) J. O'Donovan, And E. O'Curry. ed, *Ancient Laws of Ireland*, 6vols, Rolls Series, Dublin & London, 1865.
- 25) Plotinos (205-269/70) 新プラトン主義の実質上の創始者。彼の思想は、アウグスティヌスはじめ、中世の神学思想、およびルネサンス期の哲学思想に多くの影響を与えた。彼の哲学の特色は、その時代の主要な精神的課題であった宗教的要求に答えて、特にプラトンから出発し、アリストテレスやストア派などのギリシャ諸哲学の思想を総合した点である。その中心観念は全存在および価値の根源としての<一者>の思想である。主著: *Enneades*
- 26) *The Pseudo-Dionysian writings* (偽ディオニシウス文書) デイオニシウスの書物として知られていた一群の書物。おそらく、5世紀終わりか6世紀に書かれたものであり、その著者はシリアの修道院の人であったようである。単性論者によって使徒行伝(17:34)のアレオパゴスのデオヌシオの著とされたため、<偽アレオパギータ>と呼ばれたこともある。
- 27) 532年から626年までの復活祭祝日を算出することによって、そこから復活祭日を規定する
- 28) 28年から559年までの復活祭祝日を算出することによって、そこから復活祭日を規定する
- 29) K. Hughes, *The Church in Early Irish Society*, London, 1996, pp212,214-215.
- 30) A.W.Hadden & Stubbs, ed., *Councils and Ecclesiastical Documents relating to Great Britain and Ireland*, vol.3, Oxford, 1964, pp.292-4
- 31) Finian (-549) アイルランドの修道院運動創始者である。
- 32) L. Birlir, *The Irish Penitentials* Dublin, 1975, pp.74-95.
- 33) B. Krusch. *Vita Columbani Abbatis discipulorum-umque eius libri duo*, in *Monumenta Germaniae Historica, Scriptorum Rerum Merovingicarum*, vol.1, 1902, pp.1-152.
- 34) 本稿第1章I節②を参考に
- 35) Gregorius 1 (在位590-604) 最期のラテン教父。中世教会史の開始者と目される。文法、修辭、法律などを学び、ユスティニアス2世よりローマ市総督に任命された(573)が、のち伝家の所領を売却、修道士となり貧民に施与、ローマ、シチリヤ等などに7箇所の修道院を建設した。ローマ教会七執事の一人によってコンスタンティノポリスの宮廷に教皇使節として派遣され(579-85)、帰国後修道院長に就任(585)。この頃、奴隷市場でアングル人を見て、<アングルではなくアングル(天使)だ。この人たちに伝道したい>と言ってイギリス伝道を夢見たという。ペラギウス2世の死後、推されて教皇に就任(590)。修道士出身の最初の教皇となった。
- 36) J. F. Kenney, *The Sources for the Early*

- History of Ireland; Ecclesiastical, Dublin, 1979, pp.337-339.
- 37) Synod of Whitby 664年イングランドのアイ  
ルランド系教会とローマ系教会との復活祭日付  
の統一を図るために、ノーサンブリア王オズウィ  
ンが召集した教会会議。この会議によって、ア  
イルランド系教会はローマ方式を採用する。
- 38) 盛節子著『アイルランドの宗教と文化』日本  
基督教団出版局, 1991, 191頁。
- 39) Ui Neill 6世紀の終わりまでにアルスター地  
方西部とレントスター地方北部の大半を支配し  
た。ミーズ州のタラにある南部の本拠地から、  
彼らはアイルランド全土の上王権を主張した。
- 40) 盛節子著『アイルランドの宗教と文化』48頁。
- 41) Egbert (678-766) ヨークの初代大司教。ノー  
サンブリア王ケオウルフの子。ノーサンブリア  
王となった兄弟エアベルトと協力して、教会と  
国家の関係を密接にならしめ、多くの改革を遂  
行した。
- 42) Amathorex 反伝統派の学者オラヒリーによっ  
て、彼がオクセルにおけるゲルマヌスの先代  
司教アマトールと同一視されるが、実際にどう  
であるかは不明。
- 43) W. Stokes, The Tripartite Life, Vol.2,  
p.439.
- 44) Ibid., p.439.
- 45) Ibid., p.445.
- 46) Ibid., p.445.
- 47) Ibid., p.445.
- 48) Ibid., p.447.
- 49) Ibid., p.447.
- 50) Ibid., p.343.
- 51) P. Grosjean, S. Patrice a auxerre sous S.  
Germain, Analecta Bollandiana  
75, Paris, 1959, pp.170-171.
- 52) D.A. Bincy, Patrick and His Biographers,  
Dublin, 1962, p.86.
- 53) ムルターが伝承を記した7世紀, アイルラン  
ドの南部を除く広い地域を治めた一族である。
- 54) ケルト古来の自然哲学や神学・法律などの多  
くの知識を保有する知者であり, その豊かな知  
識によって, 王より助言者・歴史家・法律家・  
預言者・詩人など様々な仕事を任せられていた。
- 55) W. Stokes, The Tripartite Life, Vol.1, p.41.
- 56) Ibid., p.41.
- 57) Ibid., p.43.
- 58) Ibid., p.43.
- 59) Ibid., p.87.
- 60) Ibid., p.45.
- 61) Ibid., p.113.
- 62) Ibid., p.113-115.
- 63) Ibid., p.115.
- 64) Ibid., p.117.
- 65) Ibid., p.117.
- 66) Ibid., p.117.
- 67) Ibid., p.117.
- 68) Ibid., p.119.
- 69) Ibid., p.119.
- 70) Ibid., p.119.
- 71) Ibid., p.119.
- 72) L. Bieler, The Patrician Texts, p.165.
- 73) B. Grogan, 'Eschatological Teaching of  
the Early Church', Biblical Studies, The  
Medieval Irish Contribution, ed. M.  
MacNamara, Dublin, 1976, pp.46-58.
- 74) Ibid., pp.46-47.